

歴文特別企画 27年5月研修会

～大和と出雲～

## 「神話の国出雲を訪ねる」

### 資 料

1、研修会参加者名簿

2、旅程とルート

3、歴史資料

資料① 古代の出雲について

資料② 神話と出雲、付表 神統譜

資料③ 出雲国風土記の世界

資料④ 出雲と大和のつながり

資料⑤ 遺跡と古墳

4、宿泊など案内（別途配布します）

別紙 宿の案内 ニューウエルシティ出雲

別紙 島根ワイナリー

奈良・人と自然の会

歴史文化クラブ

（5月31日～6月1日）

# 出雲研修会 行程表

第一日目 (5月31日)

《高速道路・有料道路》——

《一般道路》——

近鉄西大寺駅南口 —— (宝来IC) —— (第2阪奈・阪神高速) —— (東大阪JCT) —— (近畿道)  
(8:00出発)

—— (吹田JCT) —— (中国道) —— 西宮名塩 —— (落合JCT) —— (米子道) ——  
(WC休憩)

勝央SA —— 蒜山高原SA —— (米子IC) —— (R9) —— (米子西IC) —— (安来道路)  
(WC休憩) (昼食・休憩)  
12:00~12:40

—— (東出雲IC) —— (R9) —— (松江玉造IC) —— (出雲IC) —— 稲佐の浜 ——  
14:10 14:30~15:00

歴史博物館見学 —— 島根ワイナリー —— ニューウエルシティイズモ  
15:20~16:20 16:30~17:00 17:10着

**\*\*\* 夕食は 18:30より \*\*\***

第二日目 (6月1日)

ニューウエルシティイズモ — 出雲大社 — 西谷墳墓群史跡公園 — 荒神谷遺跡 —  
8:00 出発 8:20~9:20 9:50~10:50 11:10~12:00

四季荘 — (宍道 I C) — (松江玉造 I C) — (R 9) — (東出雲 T C) — (安来道路) —  
(昼食・休憩) 13:50  
12:10~13:00

(米子西) — (R 9) — (米子 I C) — (米子道) — 大山 P A — (落合 J C T) —  
(W C 休憩)  
14:30~14:45

(中国道) — 西宮名塩 — (吹田 J C T) — (近畿道) — (東大阪 J C T) —  
(W C 休憩)  
17:30~17:45

(阪神高速・第2阪奈) — (宝来 I C) — 近鉄西大寺駅南口：解散  
18:40~19:00

## 出雲研修会参加者名簿(アイウエオ順)

	氏名	出席確認		氏名	出席確認
No. 1	青木 幸子		No. 15	辻本 信一	
No. 2	阿部 和生		No. 16	寺田 孝	
No. 3	池田 敬二郎		No. 17	富井 忠雄	
No. 4	池田 富子		No. 18	永井 幸次	
No. 5	池田 信明		No. 19	* 中井 弘	
No. 6	岩本 次郎		No. 20	西谷 範子	
No. 7	上西 千代子		No. 21	羽尻 嵩	
No. 8	内河 洋文		No. 22	* 坂東 久平	
No. 9	岡崎 節子		No. 23	藤田 秀憲	
No. 10	萱野 勉		No. 24	* 古川 祐司	
No. 11	* 川井 秀夫		No. 25	八木 順一	
No. 12	下村 晴文		No. 26	山中 笙子	
No. 13	* 鈴木 末一		No. 27	弓場 厚次	
No. 14	辻本 愛子		No. 28	和田 啓志	

\* は担当世話人

## 古代の出雲について

### ① 弥生時代前期（BC300頃～BC170頃）

大陸や朝鮮半島からの渡来人らによって、出雲平野や島根半島沿岸部に朝鮮半島系の土器、卜占、支石墓の影響を受けた埋葬風習、土笛の文化が伝わる。



古浦砂丘遺跡  
(松江市)

松菊里系土器

### ② 弥生時代中期（BC170頃～BC50頃）

加茂岩倉遺跡（雲南市加茂町）銅鐸 39 個、荒神谷遺跡（<sup>ひかわ ひかわ</sup>簸川郡斐川<sup>かんぼ</sup>町神庭西谷）で銅剣 358 本・銅鐸 6 個・銅矛 16 本など出土。青銅器を用いる祭祀が行われる。この時期と重なる田和山遺跡（松江市乃白町）には 3 重の環濠があり、その内側が祭祀空間と推測され、2 間角 9 本柱の建物跡は大社造りの原型か。青銅器の埋納は弥生時代中末～後期初頭頃（紀元前後）である。この頃、近畿・東海地方では大型銅鐸の「見る銅鐸」の祭りが続くが、出雲ではすでに青銅器の祭祀は終わっていたと考えられる。

### ③ 弥生時代中期後半（BC50頃）～後期末頃（AD250頃）

この時期に四隅突出型墳丘墓がつくられた。この墳丘墓は出雲を初め日本海側の山陰・北陸などにつくられ、大型のものは出雲西部の西谷墳墓群（出雲市大津町）と東部の仲仙寺古墳群（安来市西赤江町）で、それぞれ、その地域を支配した王の墓と考えられる。西谷 3 号墓からは中国産の朱・ガラス製勾玉のどのほか、出雲在地の土器、吉備や東山陰～北陸産の土器が出土しており、それらの地域との交流を示している。

### ④ 弥生時代後期（AD50頃～250頃）

この頃、中海・宍道湖の南岸段丘上に高地性集落が営まれる。鉄器は中期に鑄造や鍛造の鉄斧が出土し、後期になると、北部九州・伯耆・丹後とともに出雲の鉄器出土量が多く、鉄器製作が盛んに行われたことを物語る。

### ⑤ 古墳時代前期（250頃～400頃）

出雲では荒島丘陵に大成古墳（<sup>おおなり</sup>安来市荒島）など 1 辺約 60 m、高さ 6 m のわが国最大の大型方墳が造られ、斐伊川中流域にも「景初三年」（239）銘の三角縁神獸鏡を副葬した方墳（<sup>かんぼら</sup>神原神社古墳（雲南市加茂町）が築造された。前期末頃には前方後円墳も築造され、やがて各地に大型の円墳や前方後円墳・前方後方墳などが多くつくられるようにな

る。なお、卑弥呼の死は248年ごろと考えられる。

⑥ 古墳時代後期（500頃～）

6世紀中ごろには松江市山代二子塚（前方後方墳<sup>やましろふたごづか</sup>）・出雲市今市大念寺古墳（前方後円墳）という全長90mを超える傑出した規模の古墳が出雲の東（意宇<sup>おおう</sup>）と西（杵築<sup>きづき</sup>）に築造され、2つの大きな勢力に纏まったことがうかがえる。この被葬者か、その次の代の頃には出雲が統一されるようである。（注1）

6C代造営の岡田山1号墳（前方後方墳、松江市大庭町<sup>おおおぼ</sup>）から出土した大刀に「各田口臣」（額田部臣）との銘文があり、額田部臣は『出雲国風土記』に大原郡（意宇郡に西接）の郡司として名がみえることからヤマト政権との深い結びつきが推察できる。

⑦ 出雲のクニの成立

出雲のクニの成立を巡っては、東部の意宇勢力が西部の杵築（神門<sup>かむと</sup>）勢力を打倒し出雲国造に任命されたとの説や、ヤマト勢力がまず西部出雲を平定し、その後、意宇が配下になり本拠を意宇に移し、出雲国造に任命されたという説があり、説が分かれている。

（注1）兄の出雲振根が九州に出かけている間にその弟飯入根が神宝をヤマトに差出したことを怒った振根が、ヤマトから派遣された吉備津彦らに討たれる説話（崇神60年紀）、ヤマトタケルの策略により、贋物の剣（木刀）で戦うはめになった出雲建がヤマトタケルに滅ぼされる説話（景行記）などが、④・⑤のどの時期のことを反映しているかはよく分からない。

⑧ 律令時代の出雲（8世紀～）

出雲国については、天平5年（733）完成の『出雲国風土記』（写本）が存在し、国内9郡の郷名の由来、郡家から施設までの距離などがこまかに記載されている。国庁跡は166m四方で、松江市大草町に所在し、「大原評口磯部」と記す木簡や「少目」「厨」の墨書土器が出土している。

出雲国造は代々就任の際、潔斎をしたのち、国司や祝<sup>はふり</sup>など多数の同行者とともに進上供物を携えて都に上り、朝廷において神賀詞<sup>かむよごと</sup>を奏上した（出雲臣果安が霊亀2年（716）に行ったのが初見）。延暦17年（798）に出雲国造は、政治と祭祀の分離を理由に意宇大領との兼任を禁止される。このため国府地内の居館から出雲西部の杵築へ移住したようである。

なお、杵築大社（出雲大社）の創建は明らかではないが、斉明天皇5年（659）、天皇の命によって出雲国造が造ったのが杵築大社と考えられる。ただし、異説がある（注2）。その後、11～13世紀にかけて杵築大社の巨大神殿がたびたび転倒し、造営・

遷宮がたびたび繰り返されたことが記録されている。平成12年には、出雲大社境内から宝治2年（1248）の遷宮の際の3本の木を一つに束ねた巨大柱を用いた神殿跡が発掘され、記録・伝承が裏付けられた。

（注2）垂仁記に、口のきけない本牟智和氣御子が出雲大神を拝むことによって、口がきけるようになったので、天皇は喜んで神の宮を造られたという。斉明紀5年（645）には、「出雲国造 名を闕せりに命じて、神の宮を修葺はしむ」とある。岩波本（日本古典文学大系）はこの記載のすぐ次に「於友郡」での出来事が記されるので、意宇郡の熊野大社（松江市八雲町）のこととする。ホムチワケ王（垂仁皇子）と建皇子（皇極の孫、天智の子）とがともに唾であったことからすれば、垂仁記の記事は、斉明紀の記事の反映とも解しうる。出雲の神の崇りと靈威の信仰が感じられるのである。

（備考）

本文の骨子は『島根県の歴史散歩』（山川出版社、2008）所載の「島根県のあゆみ」によったが、記紀・出雲国風土記により補足した。（ ）の中の年代は寺澤薫案（同氏著『王権誕生』19頁、講談社、2000年）を参考として、岩本が付した。

## 《参考図》



（文責 岩本次郎）





## 神話と出雲

川井秀夫

国引き・黄泉の国・八岐大蛇退治・天の岩戸・因幡の白兔・国譲りなど、代表する日本神話は、ことごとく出雲神話である。

三巻から成る古事記の上巻は神話編であり、古事記の三分の一は出雲神話なのである。出雲は神話の国であり、古代出雲の繁栄を信ずる人がいても可笑しくはなかった。

ところが不思議なことに、考古学的に古代出雲の繁栄を証するものは、出雲から出てこなかったのである。これに明快な解答をしめしたのが津田左右吉(1873～1961年)である。即ち、記紀神話は大和朝廷により極めて政治的に作為されたものであり、何ら史実を反映するものでは無いと主張。出雲風土記の国引き神話さえ、机上の製作と論断する。

戦後、梅原 猛氏の「神々の流竄」も津田説を批判しながらも継承する。即ち、天武期の政治的権力の強大化を図るなか、大和の旧豪族の神々は遠い彼方へ捨て去るべき、捨て場として流竄の地として出雲を選び、舞台を出雲に仮託したドラマであると。

昭和59年(1984年)。異変が起きる。出雲の各地から古代の出土品が報告され、荒神谷の小丘から358本という驚異的な銅剣が発掘されるに及び、考古学の通念を揺るがす話題となる。

平成22年。梅原氏は仮託の地とした出雲説を全面的に撤回する。

### 神話 I 序

「天地初めて発けし時」ではじまる「古事記」が誕生して2015年で1303年になる。

そこに登場する神々たちは野性味に溢れ、高らかに愛し合う。それは魅力的な神々だ。日本と言う国が、まだおぼろげな輪郭しか持たなかった時代に何故このような物語が誕生し、神々はどう生きたか。まずはその序に探ろう。(千田 稔 文脈より)

序文は四字と六字からなる対句を多用する四六駢儷体で書かれている。意識すると。

「臣安麻呂が申し上げますところ、そもそも宇宙が混沌とした状態から凝ってきたが、潜在的な力や形は、まだ現れていない。その為、名をつけようともその対象なるものが無く、また動作しているものもない。誰も具体的に存在を知る事もできない」

と言う宇宙が生成されつつある状態が語られている。この現存する世界の原初を述べるという行為に歴史の原点を位置づけようとしたのである。現代を生きる我々にとっても、科学の知識から宇宙の生成を知ることは出来るとしても、それは神秘の次元に属するものである。

## 神話 II 国生み

高天原の神々(別天神)は、イザナキとイザナミの二神に「この国を造りなさい」といい、玉で飾った美しい沼矛を授ける。

二神は天の浮橋に立ち、海水をコロコロとかき回し、沼矛を引き上げると海水が滴り落ちて固まり島が誕生する。これが「淤能碁呂島」である。

▲柱(沼島 上立神岩・狭別島とも)を建て、宮殿を作り蜜月が始まる、国生みである。

順に、伊予 二名島(四国)・隠岐 筑紫島(九州)・壱岐・対馬・佐渡を生み、次に大倭豊秋津島(本州)、これまでを大八島と言う。

更に、吉備児島・小豆島・山口大島・国東女島・五島列島両児島を生む。

▲次に、神様を生む。(神統譜1 参照)

生んだ島は十四島、神は三十五柱。しかし、イザナミは火の神を生んで亡くなる。

※ 解説 1(口頭) 「ムスヒ」のこと。

※ 解説 2(口頭) なぜ淡路島から国が生まれたのか。

## 神話 III 黄泉国と禊の神々

火の神、迦具土神(カグツチカミ)を生むときに女陰を焼き、イザナミは死す。イザナギは黄泉国に妻を追うが、醜い変わり果てた姿に絶望し逃げ帰る。その黄泉比良坂は今伊賦夜坂と言われているが所在は不明。

イザナギは身を禊祓いする為、筑紫の阿波岐原(特定されてない)にやってくる。(神統譜・黄泉より戻り禊ぎして生まれた神 参照) 身に着けたものを脱ぐと神が生まれ、左の目を洗うと天照大御神、右の目を洗うと月読命、鼻を洗うと須佐之男命が生まれた。イザナギは生みの終わりに三柱の貴き子を得て喜び、それぞれに治めるべき分担を決め指示する。即ち、アマテラスには高天原を、ツクヨミには夜の国を、スサノオには海の国を命じる。

スサノオは母恋しさに根の国(島根)へ行きたいと言うが父に反対され、姉のアマテラスに泣訴する。アマテラスは乱暴者のスサノオを邪心があるとして怖がるがウケヒ(誓約)により受け入れる。

▲ 解説(口頭) ウケヒとは

## 神話 IV 素戔鳴命・八岐大蛇退治

高天原で大暴れしたスサノオは追放されて出雲の国にやって来る。葦原中国、葦が群生する「肥の河」と言う地上世界である。

娘と泣いている老夫婦と会う。八人の娘を毎年大蛇が食べに来ると言う。スサノオは娘を嫁に貰う約束で大蛇退治に乗り出す。大蛇は一つの体に八つの頭と尾、身体は杉と苔に覆われ大きさは八つの丘と谷に跨るほど。

棧敷毎に酒船を置き、泥酔して寝た大蛇を十拳劍(とつか)で切り散らす。肥の河は血の河に染まり、更に尾を切ると「都牟刈の大刀」が出現し、アマテラスに献上、これが世に言う「草薙の大刀」である。

スサノオは櫛名田比売と新婚の宮殿、「須賀の宮殿」を建てる。

～八雲立つ出雲八重垣妻籠みに八重垣作るその八重垣を～

何代か経て、天之冬衣神と刺国若比売の間に生まれた子が「大国主命」である。またの名は「大穴牟遲神」「葦原色許男神」「八千矛神」「宇都志国玉神」と五つの名を持つ。

## 神話 V 大国主命と稲羽の素兔

大国主神には八十神と言う多くの兄弟神がいたが、結局彼が国を治める事になる。

兄弟たちと因幡のくにの「八上比売」に求婚の旅をした時、兔がワニに噛みつかれ体の皮をはぎ取られ赤裸になった姿を見る。オオクニヌシは真水で洗い、蒲の花粉の上で転がれば治ると教え、ようやく元の体に戻る。喜ぶ兔はヤガヒメを手に入れるのは貴男ですよと予言する。

嫉妬に狂った兄弟たちは謀略により、二度にわたり死においやるが、カミムスビ・スサノオの神の思し召しにより、蘇生する。

古事記にはオオクニヌシの妻問い物語には北陸地方の沼河比売(ヌナカワ)に求婚し、首尾よく結婚すると記す。沼河比売は糸魚川の姫川の上流に鎮座する奴奈川神社の主神で翡翠の産地の守護神と言われる。

出雲の出土品から姫川産の翡翠の勾玉が出て、北陸との交流を考古学的に明らかとなった経緯がある。

神話が史実と結びつく豊かな古代史像が描かれて行くのは、今後の楽しみである。

## 神話 VI 大国主の国譲り

アマテラスは瑞穂の国は我が子が治めるべきと、「天の安の河原」で八百万の神を集め、再三再四使者を地上界に遣わすが音沙汰が無い。

最後に**建御雷之男神(タケイカズチノカミ)**を送り出す。

出雲の国、稻佐の浜に降り立ち、オオクニヌシ親子と会う。この問答が面白い。

建 「お前が治めている葦原中国は、アマテラスが御子に託された国ぞ」と迫る。

国 「私ではお答え出来ません。息子の事代主神に答えさせます」

事 「畏まりました。この国はアマテラスに差し上げましょう」

建 「他に何か言うような子はいるのか」国 「あとは建御名方神がいます」

名 「この国に来て、こそこそと何を喋っているのか。力比べをやろうではないか」

名は建の手を掴む。建の手は氷柱に変わり、やがて剣の刃に変わる。

今度は建が名の手を掴む。柔らかい葦を掴む様に名の手を握り潰し投げ飛ばす。

名は科野国に逃げるが観念し、諏訪に留まり葦原中国の献上を誓う。

建 「おまえの子らは天神(あまつかみ)の命に従うと言った。お前の気持ちはどうだ」

国 「二人の子の言う様に、私も仰せのままに差し出します。ただ、自らの住処いとして

宮を作りたい」

かくして、地の底に届く太い柱を建て、屋根には高天原にまで届く千木を建て、大国主命は身を隠す。古くは杵築大社と言われた。

この国譲り神話が、後の日本人の「和」の精神として受け継がれてゆく。

## 神話 VII 天照神の天の岩屋戸

これは出雲神話ではないが、日本人が一番知っている物語である。太陽神のアマテラスが岩屋に籠る舞台設定は正に日蝕現象を戯曲化した様なものである。

しかし、自然崇拝を第一とした古代の人々は、真剣に神を畏れ祭祀により平安無事を祈ったに違いない。

出演者

天照大御神            主役 太陽神

素戔鳴尊            悪役 天照神の弟

思金神                タカムスビの子 智慧の神

天宇受売命           芸能の神

天児屋命            朱桜で牡鹿の骨で占い

布刀玉命・鍛人天津麻羅(矛)・伊斯許理度売命(鏡)玉祖命4(珠)

天手力男命           力自慢の神

奈良時代の初頭の和銅六年（713年）、諸国に風土記作成の官命が下された。その内容は、「郡郷名は好字に変えよ、物産品目リストを作成せよ、土地の肥え具合や山川原野の名前の由来や老人の伝える古い伝説を書き記して提出せよ」というものであった。

平安初期の段階で数十か国の古風土記ができたはずであるが、今日曲りなりにも伝えられているものは五か国、『出雲国風土記』、『播磨国風土記』、『肥前国風土記』、『常陸国風土記』、『豊後国風土記』があるが、完本に近い形で残っているのは『出雲国風土記』だけである。

出雲の国国司が出雲国造出雲の臣果安（二四代）に編纂を委嘱し、天平五年（733年）に、果安の子、出雲臣広島（二五代）の監修のもとに秋鹿郡の人、神宅臣金太理（かんやけのおみかなたり）によつて完成した。

出雲国風土記は、最初に全体の総記、最後に巻末記を置き、各郡ごとに郡総記、郷名、寺社、山野、川、浜島、物産、郡境、方位・路程を整然と記載し、科学的合理的な印象が強い。一方、他の風土記に多い天皇・王族の巡行は一切なく、出雲で活躍した神々の記載が目立つ。「八束水臣津野命の国引き物語」、「大穴持命の子育て」、「支佐加比女命の出産」など神々の国にふさわしい神話が息づいている。

同時代に中央で編纂された「古事記」「日本書紀」には「出雲神話」が多く載せられているが、当地の出雲ではどのように語られているか、或いは全く語られていないのか、まことに興味深いものがある。

以下、そのいくつかを抜粋して考えてみよう。

\* 「出雲」の国名の始まり・・・出雲国風土記　　総記より

国の大体は、震を首とし、坤を尾とす。東と南とは山にして、西と北とは海に属く。東西一百三十七里一十九歩。南北一百八十二里一百九十三歩なり。

老、枝葉を細しく思ひ、詞源を裁り定む。亦、山野・浜浦の処、鳥獸の棲、魚貝・海菜の類、良に繁多にして、悉には陳べず。然はあれど、止むことを獲ざるは、粗梗概を挙げて、記の趣を成す。

出雲と号くる所以は、八束水臣津野命、詔りたまひしく、「八雲立つ」と詔りたまひき。故、八雲立つ出雲と云ふ。

合せて、神の社三百九十九所

一百八十四所。神祇官に在り。

二百一十五所。神祇官に在らず。

九つの郡。郷六十二里二百八十一、余戸四、駅家六、神戸七里二十一。

現代語訳（島根県古代文化センター編「解説出雲国風土記より」

※出雲国風土記

国のおおよその形は、※震を始点として※坤を  
終点とする。東と南は山で、西と北は海に接する。  
東西は一百三十七里一十九步。南北は一百八十二  
里一百九十三步。

編者は、細かいところまで考察し、伝承の本源を  
判定して記した。また山野、浜や浦などの地形、  
鳥獣の生息地、魚介、海藻類は非常に多いので、  
すべてを述べることはしない。しかしながら、や  
むを得ない場合は、大略を挙げて、この文書とし  
ての趣旨を整えた。

出雲と名づけるわけは、八束水臣津野命がおつし  
やったことには、「八雲立つ」とおつしやった。  
だから、八雲立つ出雲という。

合わせて、神社は三百九十九所。

一百八十四所は神祇官社。

二百一十五所は不在神祇官社。

九郡。郷は六十二（里一百七十九）、余戸四、駅家六、

神戸七（里一十）。

意宇郡 郷一十一（里三十三）、余戸一、駅家三、神

戸三（里六）。

島根郡 郷八（里二十四）、余戸一、駅家一。

秋鹿郡 郷四（里二十二）、神戸一（里）。

楯縫郡 郷四（里十二）、余戸一、神戸一（里）。

出雲郡 郷八（里二十三）、神戸一（里二）。

神門郡 郷八（里二十二）、余戸一、駅家二、神戸一（里）。

飯石郡 郷七（里二十九）。

仁多郡 郷四（里二十二）。

大原郡 郷八（里二十四）。

右の箇所の「郷」の字は、※靈龜元年式によって  
里を改めて郷とした。その郷名の文字表記は※神  
龜三年民部省口宣を受けて、改めた。

注一 郷里制（靈龜元年 七一五年）

一里は五三四・五m

一步は、一・七八m

一里は、三〇〇步

一郷は民戸五〇戸で構成、里は民戸  
の部落単位の名称

・地名は二字の好字で表示する

・余部は五〇戸に余ったの民戸を言う

・神戸は、その田租などが特定の神社

の財源に充てられる戸のこと

・駅家は公用の使者のための馬・宿等  
の常備施設

注二 出雲国の名の由来

記紀は、スサノオの「八雲立つ 出雲  
八重垣」の歌に起源を求める。風土記  
は、国土創造の神である、八束水臣津  
野神の発言に求める独自の伝承。

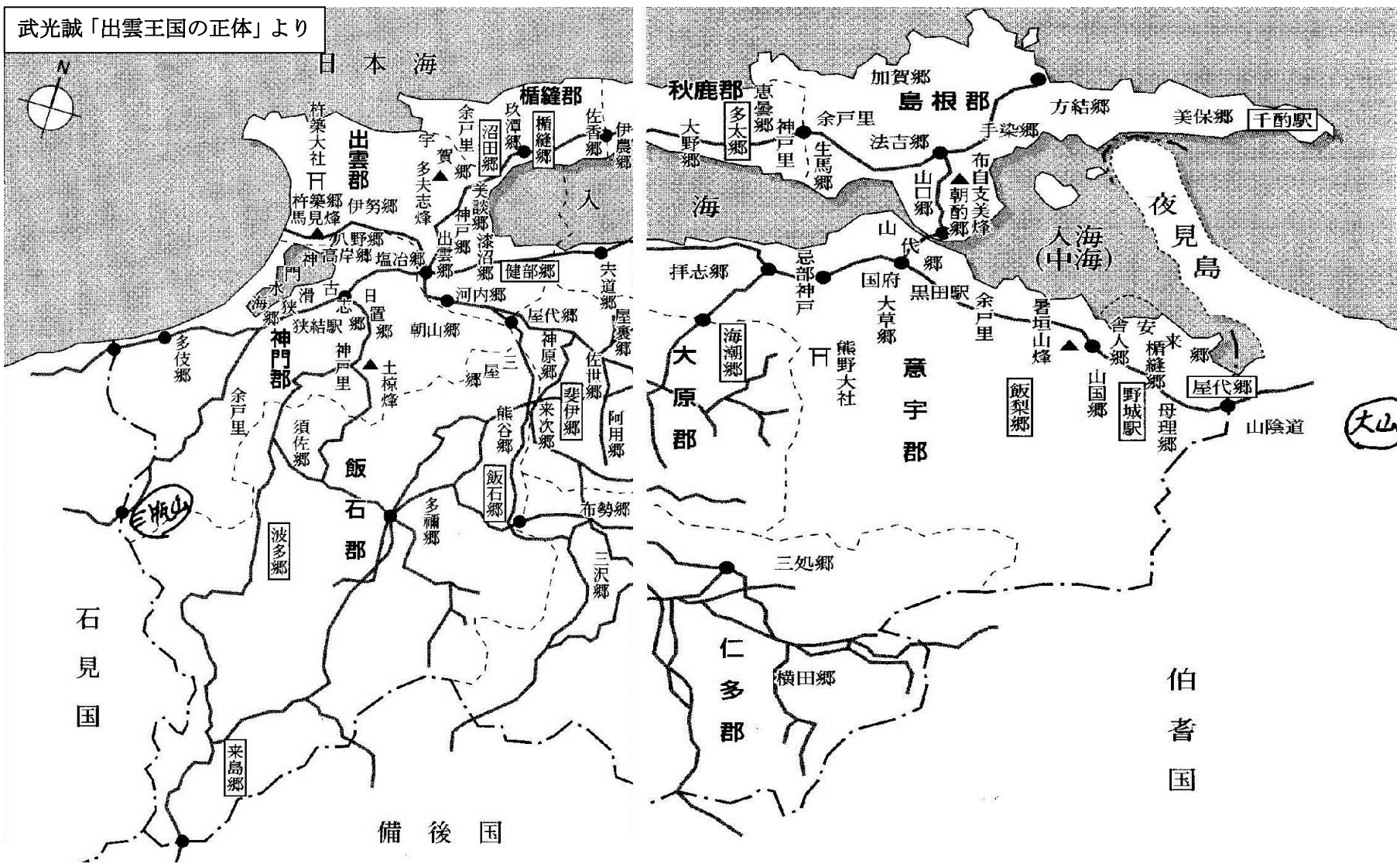
八雲とは雲が農耕に慈雨をもたらす目  
出度さを示し、自然の生命力の活発な  
国だ、という国褒めの詞である。（萩原  
千鶴）

注三 神社の数

出雲の官社の数一八四は、大和、伊勢  
に次いで多く、官社以外の神社を含め  
ると、出雲が日本一だったと言われる

注四 風土記の編纂年月日

天平五年二月三〇日と記されていて、  
偽書説もあったが、当時の「儀鳳曆」  
では二月は大の月であり、三〇日は存  
在した。



\*国引き神話・・・意宇郡く意宇郡総記より

意宇と号くる所以は、国引き坐しし八束水臣津野命、詔りたまひしく、「八雲立つ出雲の国は、狭布の稚国在る哉。初国小さく所作れり。故、作り縫はむ」と詔りたまひて、「栲衾志羅紀の三埼を、国の余り有りやと見れば、国の余り有り」と詔りたまひて、童女の胸鉏所取らして、大魚のきだ衝き別けて、はたすすき穂振り別けて、三身の綱打ち掛けて、霜黒葛くるやくるやに、河船のもそろもそろに、国来々々と引き来縫へる国は、去豆の折絶より、八穂尔支豆支の御埼なり。此を以ちて、堅め立つる加志は、石見の国と出雲の国との堺有る、名は佐比売山、是也。亦持ち引ける綱は、蘭の長浜、是也。

亦、「北門の佐伎の国を、国の余り有りやと見れば、国の余り有り」と詔りたまひて、童女の胸鉏所取らして、大魚のきだ衝き別けて、はたすすき穂振り別けて、三身の綱打ち掛けて、霜黒葛くるやくるやに、河船のもそろもそろに、国来々々と引き来縫へる国は、多久の折絶より、狭田の国、是也。

亦、「北門の良波の国を、国の余り有りやと見れば、国の余り有り」と詔りたまひて、童女の胸鉏所取らして、大魚のきだ衝き別けて、はたすすき穂振り別けて、三身の綱打ち掛けて、霜黒葛くるやくるやに、河船のもそろもそろに、国来々々と引き来縫へる国は、宇波の折絶より、闇見の国、是也。

亦、「高志の都都の三埼を、国の余り有りやと見れば、国の余り有り」と詔りたまひて、童女の胸鉏所取らして、大魚のきだ衝き別けて、はたすすき穂振り別けて、三身の綱打ち掛けて、霜黒葛くるやくるやに、河船のもそろもそろに、国来々々と引き来縫へる国は、三穂の埼なり。持ち引ける綱は、夜見の島なり。固堅め立つる加志は、伯耆の国有る火神岳、是也。

「今は、国は引き訖へつ」と詔りたまひて、意宇の社に、御杖衝き立てて、「おゑ」と詔りたまひき。故、意宇と云ふ。所謂意宇の社は、郡家の東北の辺、田中にある龜、是也。周り八歩許、其の上へ一つの木有りて茂れり。



現代語訳（以下荻原千鶴著「出雲国風土記」より）

意宇と名づけるわけは、国をお引きになった八束水臣津野命がおっしゃったことには、「八雲立つ出雲の国は、幅の狭い布のような幼い国だなあ。初めの国を、小さく作ったな。それでは作って縫いつけることにしよう」とおっしゃって、「(栲衾)新羅の三崎を、国の余りがあるかと思つて見ると、おお、国の余りがある」とおっしゃって、童女の胸のような鋤を手に取られ、大魚のえらを突くように土地を突き刺し、大魚の肉を（はたすすき）屠り分けるように、土地を切り離し、三本縫りの太綱を打ち掛けて、霜つづらを繰るように、たぐり寄せたぐり寄せ、河船を曳き上げるようにそろりそろりと、「国よ来い、国よ来い」と引いて来て縫いつけた国は、去豆の断崖から（八穂<sup>やほ</sup>穂<sup>ほ</sup>）杵築の御崎までだ。こうして引いてきた国を、固定するために立てた杭は、石見の国と出雲の国との境にある、名を佐比売山というのが、まさにこれだ。また手に持つて引いた綱は、菌の長浜がまさにこれだ。

また、「北の門の佐伎の国を、国の余りがあるかと思つて見ると、おお、国の余りがある」とおっしゃって、童女の胸のような鋤を手に取られ、大魚のえらを突くように土地を突き刺し、大魚の肉を（はたすすき）屠り分けるように、土地を切り離し、三本縫りの太綱を打ち掛けて、霜つづらを繰るように、たぐり寄せたぐり寄せ、河船を曳き上げるようにそろりそろりと、「国よ来い、国よ来い」と引いて来て縫いつけた国は、多久の断崖から狭田の国<sup>さ</sup>、まさにこれだ。

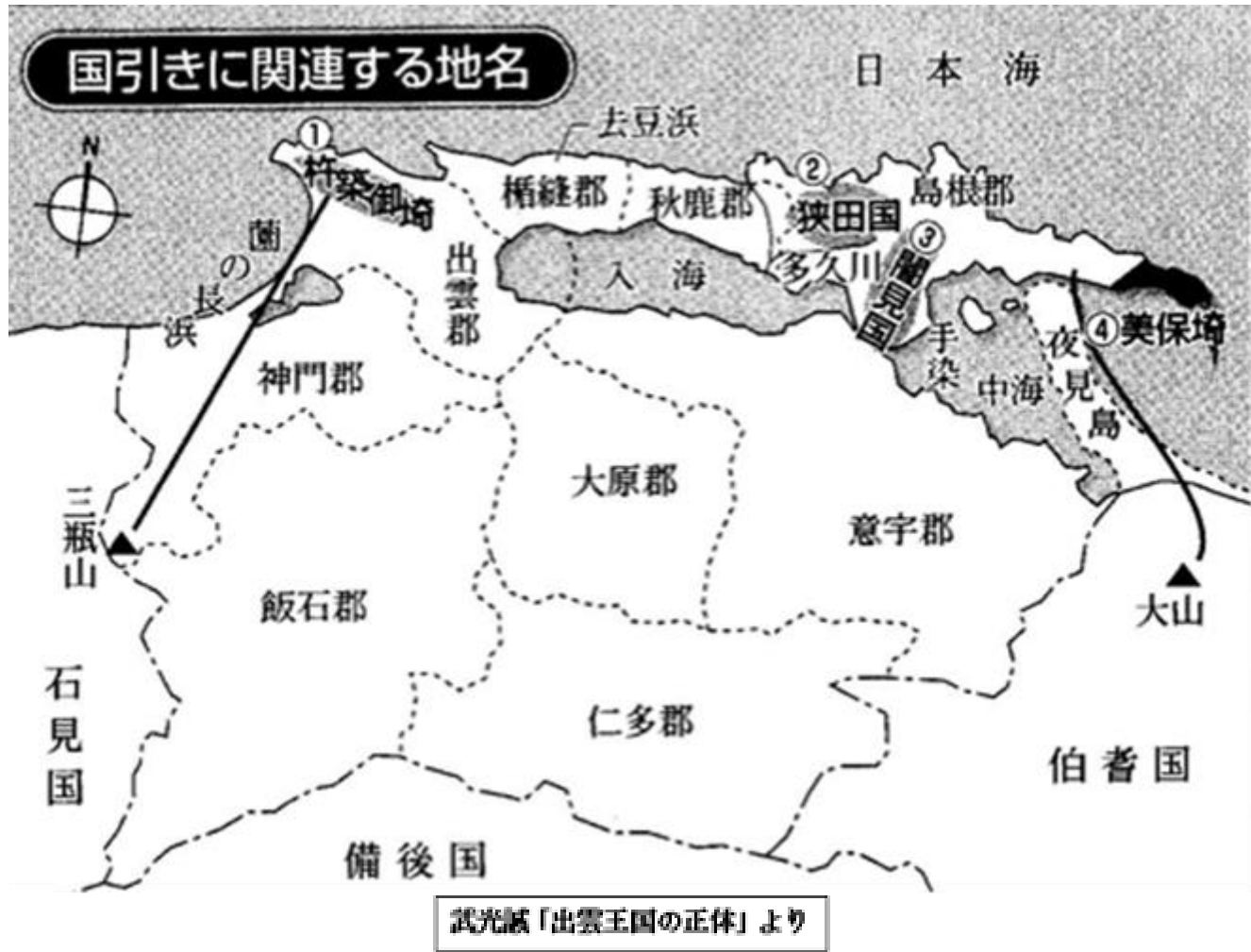
また、「北の門の良波の国を、国の余りがあるかと思つて見ると、おお、国の余りがある」とおっしゃって、童女の胸のような鋤を手に取られ、大魚のえらを突くように土地を突き刺し、大魚の肉を（はたすすき）屠り分けるように、土地を切り離し、三本縫りの太綱を打ち掛けて、霜つづらを繰るように、たぐり寄せたぐり寄せ、河船を曳き上げるようにそろりそろりと、「国よ来い、国よ来い」と引いて来て縫いつけた国は、宇波の断崖から闇見の国がまさにこれだ。

また、「越の都都の三崎を、国の余りがあるかと思つて見ると、おお、国の余りがある」とおっしゃって、童女の胸のような鋤を手に取られ、大魚のえらを突くように土地を突き刺し、大魚の肉を（はたすすき）屠り分けるように、土地を切り離し、三本縫りの太綱を打ち掛けて、霜つづらを繰るように、たぐり寄せたぐり寄せ、河船を曳き上げるようにそろりそろりと、「国よ来い、国よ来い」と引いて来て縫いつけた国は、美保の崎だ。手に持つて引いた綱は、夜見の島だ。引いてきた国を、固定するために立てた杭は、伯耆の国にある、火神岳がまさにこれだ。

「さあ今は、国は引き終えた」とおっしゃって、意宇の杜に、御杖を突き立て、「おう」とおっしゃった。だから、意宇<sup>お</sup>という。いわゆる意宇の杜は、郡役所の東北のあたり、田の中にある小山がこれだ。周囲八歩「一四・二メートル」ほど。その上に一本の木があつて茂っている。

拜志の郷。郡家の正西二十一里二百一十歩。天の下所造らしし大神命、越の八口を平げむと為て幸しし時に、此処の樹林茂盛れり。尔の時詔りたまひしく、「吾が御心の波夜志」と詔りたまひき。故、林と云ふ。神龜三年、字を拜志と改む。即ち正倉有り。

\*大穴持命と越の国①・・・意字郡く拜志の郷より



\*国譲りと出雲の国・・・意宇郡く母理郷より

母理の郷。郡家の東南三十九里一百九十步。天の下所造らしし大神、大穴持命、越の八口を平げ賜ひて還り坐す時に、長江山に坐して詔りたまひしく、「我が造り坐して命らす国は、皇御孫の命、平けく世所知らせと依せ奉る。但、八雲立つ出雲の国は、我が静まり坐す国と、青垣山廻らし賜ひて、玉珍置き賜ひて守りたまふ」と詔りたまひき。故、文理と云ふ。神龜三年、字を母理と改む。

\*ワニ(サメ)の伝承・・・意宇郡く安来郷より

安来の郷。郡家の東北二十七里一百八十步。神湊佐乃衰命、天の壁立廻り坐しき。尔の時、此処に坐して詔りたまひしく、「吾が御心は、安平けく成りぬ」と詔りたまひき。故、安来と云ふ。

即ち、北の海に比売崎有り。飛鳥の淨御原の宮に御宇しし天皇の御世、甲戌の年七月十三日に、語臣猪麻呂の女子、件の崎に逍遙びて、邂逅に和尔に遇ひ、所賊はえて皈らざりき。尔の時、父猪麻呂、所賊はえし女子を、浜の上に斂め置き、て、大く苦憤を発し、天に号び地に踊り、行きて吟ひ居て嘆き、昼夜辛苦みて、斂めし所を避ること無し。是作る間に、数日を経歴たり。然して後、慷慨の志を興し、箭を磨ぎ鋒を鋭くし、便の処を撰びて居て、即ち擗み訴へ云ひしく、「天神千五百万、地祇千五百万、并びに、当国に静まり坐す三百九十九社、及、海若等、大神の和魂は静まりて、荒魂は皆悉に、猪麻呂が乞む所に依り給へ。良に神靈坐すこと有らば、吾が傷ふ所となし給へ。此を以ちて神靈の神所るを知らむ」。尔の時、須臾有りて、和尔百余り、静かに一つの和尔を圍繞みて、徐に率依り来て、居る下に從りて、進まず退かず、猶し圍繞めるのみ。尔の時、鋒を挙げて中央なる一つの和尔を刃して、殺し捕ること已に訖へぬ。然して後、百余りの和尔解散けき。殺割けば、女子の一つの脛屠り出でき。仍りて和尔をば、殺割きて串に掛け、路の垂に立てき。安来の郷の人、語臣与が父也。尔の時より以来、今日に至るまで六十歳を経たり。

注 語臣猪麻呂は語り部。海若(わだつみ)の神は、海洋民族の証しとも考えられる。

安来市の毘売塚古墳には脛骨の欠損した人骨を納めた石棺が発掘されているという。

きさかひめのみこと

### \* 枳佐加比女命と佐太大神・・・島根郡く加賀の潜戸

加賀の神埼。即ち窟有り。高さ一十丈許、周り五百二步許。東と西と北に通る。所謂佐太大神の所産生れし処也。所産生るる時に臨みて、弓箭亡せ坐しき。尔の時、御祖神魂命の御子、枳佐加比売命、願ぎまししく、「吾が御子、麻湊羅神の御子に坐さば、亡せし所の弓箭出来」と願ぎ坐しき。尔の時、角の弓箭、水の随に流れ出づ。尔の時、弓を取りて詔りたまひしく、「此は弓箭に非ず」と詔りたまひて、擲げ廢て給ふ。又、金の弓箭流れ出で来。即ち待ち取らし坐して、「闇鬱き窟なる哉」と詔りたまひて、射通し坐しき。即ち御祖支佐加比売命の社、此処に坐す。今の人、是の窟の辺を行く時に、必ず声磗磗かして行く。若し密かに行かば、神現れて飄風起り、行く船は必ず覆へる。

注 枳佐加比女命は赤貝の女神、古事記では殺された大國主命を再生させる

### \* 大穴持命の子育て・・・仁多郡く三津郷（三沢郷）

おおなもみこと

三津の郷。郡家の西南二十五里。大神大穴持命の御子、阿遲須伎高日子命、御須髮八握に生ふるまで、昼夜哭き坐して、辞通はざりき。尔の時、御祖の命、御子を船に乗せて、八十島を率巡りて、宇良加志給へども、猶哭くこと止まずありき。大神、夢に願ぎ給ひしく、「御子の哭く由を告らせ」と夢に願ぎ坐ししかば、則夜の夢に御子辞通ふと見坐しき。則ち寤めて問ひ給へば、尔の時、「御津」と申したまひき。尔の時、「何処を然云ふ」と問ひ給へば、即ち御祖の御前を立ち去り出で坐して、石川を度り、坂の上に至り留り、「是処ぞ」と申したまひき。尔の時、其の津の水活れ出で、御身沐浴み坐しき。故、国造、神吉事奏しに、朝廷に参向ふ時に、其の水活れ出でて、用る初むる也。此に依りて、今も産む婦、彼の村の稻を食はず。若し食ふ者有らば、所生るる子已に云ふ也。故、三津と云ふ。即ち正倉有り。

横田の郷。郡家の東南二十一里。古老の伝へて云はく、郷の中に田四段許有り。形聊か長し。遂に田に依りて、故、横田と云ふ。即ち正倉有り。以上の諸の郷より所出る鉄、堅くして、尤も雑の具を造るに堪ふ。

本資料は、出雲国風土記（荻原千鶴）講談社学術文庫、  
解説出雲国風土記（島根県古代文化センター編）、  
日本最古の神政国家出雲王国の正体（武光誠）PH P 研究所  
から引用し作成した。

古川祐司

## 古代出雲と大和・邪馬台国のつながり

2015年5月作成 中井 弘

### はじめに

1) 折しも「古代出雲とヤマト政権」と題する展覧会が、近つ飛鳥博物館で開催されています。(4月25日～6月28日)

その展示の冒頭のパネルで出雲とヤマト政権の関連性について述べています。

「関連性は文献史学においては定説は特に見られません。考古資料からは王権とのつながりを保ちつつも、独自の文化を生み出す地域力が強く見られます。こうした地理的な位置関係こそが、出雲がヤマト王権にとって無視し得ない存在となった背景ではないでしょうか。但しまだまだ明らかでないことも多いことから、これからの資料の増加と研究の進化を見守る必要があるでしょう。」

2) 展覧会の講演会で白石太一郎館長は「出雲は邪馬台国連合には含まれていなかった」と題して興味ある仮説を示されました。

「弥生時代後期以降、倭国は本格的な鉄器の時代になりましたが、この時期、鉄生産は行われておらず、朝鮮半島南部の弁辰から鉄資源を輸入していました。この輸入ルートを掌握していたのは、北部九州の伊都国や奴国など玄界灘沿岸諸国でした。独自の輸入ルートを持たない瀬戸内や畿内勢力は、入手ルートの支配権を奪取するために広域の政治連合・邪馬台国連合を形成しました。

日本海沿岸の出雲は、独自の鉄資源の入手ルートを確保しており、邪馬台国連合に加わる必要はありませんでした。3世紀中葉になって、遅れてその政治連合に加わったのが「初期ヤマト政権」でありました。オオクニヌシはアマテラスの度々の要請に応じ、支配していた葦原中国を天皇家に譲ったという国譲り神話は、出雲が遅れてヤマト王権に服属し、国を譲ったことを物語っています。」

3. 平安京や律令制度の研究者、村井康彦教授（国際日本文化センター名誉教授）は古代史の定説にこだわらずに、「古事記」「日本書紀」の深い象徴性をもつ神話伝承と出雲風土記・魏志倭人伝を読み解いて

①邪馬台国は出雲系氏族連合によって樹立されたクニであった。

②大和朝廷は邪馬台国の延長ではなく、九州から入ってきた勢力「神武東征軍」が樹立した。

という仮説をたて、自らの足で多くの古代遺跡を歩いて、「邪馬台国・大和朝廷非連続説」を発表、古代史・古代国家像を塗り替える「出雲と大和」（岩波新書2013年）を著しました。

この著書の中から出雲と大和の関連部分のみ簡潔に要約します。

## 1. 奈良の三輪山になぜ、出雲の神「大物主神」が祀られたのか。

### ・大物主神とはどんな神か

日本書紀では出雲の神「大国主神」は「大物主神」とも、また「国作大己貴神（オオナムチ）」ともいうと記しています。大国主神は7つの異名を持ち、異名の神はそれぞれ大国主神の分身として、異なった力を持って仕事を分担していました。そのなかでもっとも重要な役割を担ったのが「国作大己貴神」（オオナムチ）で、日本書紀が挙げた大国主神の別名のなかで、大己貴神だけ「国作り」が冠せられています。

大己貴神は葦原中国（あしはらなかつくに：天上の高天原と地下の黄泉の国の間に位置し、人間が住む所）の国作りを担った神で、この神の働きの結果、葦原中国いわゆる日本の国土を完成させました。そしてその後を継いで国作りに取り掛かったのが大国主神であります。

### ・国作り物語

日本書紀の国作り物語では、大国主神は少彦名神と協力して国造りに取り掛かりましたが、少彦名神は仕事半ばで常世の国に去ってしまいます。そのため国作りが頓挫しかけたとき、海を照らしながらやって来た神に助けられ国作りを完成させることが出来ました。その神というのが大己貴神の靈魂（幸魂・奇魂（サキミタマ・クシミタマ））で、大和の東の青垣に祀られることを求めました。そして三輪山に宮殿を創って祀られた大己貴神が三輪山の主となったところで、大己貴神の仕事の国造りが終わり、大物主神が祭神となりました。

このことは天皇勢力以前に出雲の神、つまり出雲勢力が大和に進出して、葦原中国の支配を完了していたということになります。

### ・磐座信仰と出雲系祭祀

三輪山の麓にある大神神社は出雲系の「大物主神」が祭神ですが、人が神を拝する拝殿はあっても、祭神を祀る本殿はありません。社殿祭祀へと時代が推移しても、大神神社は本殿を持たない自然祭祀の形を今日まで変えようとはしませんでした。

この地方には三輪山そのものをご神体として参拝する「神奈備山信仰」が古くからあり、そこに人格神としての大物主神が祀られたことになります。山頂一帯を覆う巨石群に神の霊が宿るとする「磐座信仰」があり、大物主神は山頂の奥津磐座とされ、非常に厳かな雰囲気は漂っています。

出雲の斐伊川流域には磐座を持つ神社は、矢櫃神社（雲南市）、須賀神社（同市）、曾支能夜神社（斐川町仏経山）など多くあります。磐座信仰は象徴的な出雲の祭祀です。近畿地方でも出雲の神を祭神とする磐座のある神社は、三輪山をはじめ、亀岡市の「出雲大神宮」、交野市の「磐船神社」、御所市の「葛木御

歳神社」などがあります。

磐座のある神社には鉄鉱脈が存在し、斐伊川流域には出雲族に顕著な鉱山の開発、とくに鉄の生産地であったことがわかります。(奈良の大神神社の麓にも金屋、穴師(鉄の品部)など鉄生産に関連のある地名が残っていて、狭井川では今も良質の砂鉄を見ることが出来ます。)

## 2. 邪馬台国は出雲系氏族によって擁立された王朝である。

### ・邪馬台国の所在と出雲系氏族

村井教授は、邪馬台国の王宮は大型の環濠集落が発見された「唐古・鍵遺跡」周辺の田原本町の市街地の下に埋もれていると断言しています。その北部に物部氏、西南に鴨氏、東部に大神氏が所在し、王宮を守護したこれら三族はいずれも出雲系の氏族です。

8世紀はじめに出雲国造果安(クニノミヤッコ、出雲ではコクゾウ)が出雲から大和朝廷にやってきて、天皇に言祝ぐ「神賀詞(かむよごと)」を奏上しますが、注目されるのは大和に古くからある4つの神社(三輪の大神神社、葛城の高鴨神社、宇奈堤の川俣神社、飛鳥の伽夜奈留美神社)を皇室の守神として奏上していることです。このことは四神社とも大和朝廷成立前から出雲系神社として存在していたことを証明しています。

これらのことから大和の国には卑弥呼の時代から出雲系の神と人が満ち満ちていたのです。当時出雲系とされる氏族は、物部氏、蘇我氏、葛城氏、海部(アマベ)氏、尾張氏、和珥氏、大三輪氏、鴨氏などでした。邪馬台国滅亡後、大部分の氏族は大和朝廷に帰順しましたが、尾張氏(熱田神宮)、鴨氏(山城上賀茂神社・下鴨神社を奉祭)などは大和を去りました。

### ・邪馬台国・大和朝廷非連続説

大和盆地はかつて邪馬台国の卑弥呼が支配し、その後、大和朝廷の王宮が存在したことから、邪馬台国畿内説の論者の多くは邪馬台国を大和朝廷の初期段階の姿とみる「邪馬台国・大和朝廷連続説」をとっています。

村井教授の「非連続説」の根拠は、「魏志倭人伝」で度々登場する邪馬台国や卑弥呼の名前が「日本書紀」や「古事記」に全く出てこないことを論拠としています。

「三世紀前半、使者を帯方郡さらには洛陽まで派遣して、魏王から「親魏倭王」の称号を受け、銅鏡百枚などを下賜された倭の女王が大和朝廷の祖とすれば、その人物を皇統譜に載せて当然である。しかるに「卑弥呼」は日本の神話歴史のなかでは、完全に無視されているのである。「日本書紀」の神功皇后紀の39年条で「魏志曰く・・・倭の女王」、40年条では「・・・倭国の王」43年条で

は「・・・倭国」と魏志倭人伝が記載するところをそのまま引用してたった三度しか出てこない。これはひとえに卑弥呼が大和朝廷の祖ではないとしていたからである。邪馬台国の名も同じく日本書紀にまったく載せられる事が無かった。これは邪馬台国が大和朝廷の前身ではなかったとしているからである。」

### 3. 大和朝廷は邪馬台国の延長ではなく、「神武東征軍」が樹立した。

魏志倭人伝からは知ることが出来なかった邪馬台国最後の状況は「日本書紀」が克明に記録しています。戦後の教育では、「神武東征」は偉大なフィクションで歴史ではないとされてきましたが、教授は決して絵空事ではなく、そこには史実が隠されているとしています。

#### ・記紀の「神武東征」説話

邪馬台国は実際の政治は男王が摂っていましたが、非凡なシャーマンとしての卑弥呼が居ることで成り立っていた女王国でありました。その卑弥呼を失った邪馬台国連合の結束が動揺したことは想像に難くはありません。

卑弥呼の死の前後から「魏志倭人伝」が語るように、狗奴国（くな）をはじめとする諸勢力が邪馬台国打倒の動きを見せ始めていました。その最大勢力こそ、九州で力を結集し機会を窺っていた「記紀」でいうところの神武勢力でありました。卑弥呼亡き後の混乱に乗じて侵攻を開始しました。

#### ・生駒の戦い

九州高千穂宮から出立した神武軍は、瀬戸内海を東に進み、浪速の渡（上町台地辺り）から上陸、大和を目指しましたが河内国日下（東大阪市日下）に至り孔舎衛坂（くさえさか：近鉄生駒トンネル西口辺り）で大和の豪族・長髓彦の軍勢と激戦となって敗退しました。

#### ・河内を大きく迂回して熊野方面から大和を目指す。

八咫鳥の先導で北上。途中土豪の国巢、吉野首、阿太の鵜飼、和珥や高尾張の土蜘蛛など帰順させて進軍します。

#### ・菟田から大和盆地へ

大和側の防御は「女坂」「男坂」「墨坂」「磐余」「磯城」と大和盆地の東部から西南部にかけて防衛線を布陣して神武軍を迎え撃ちました。これらの軍勢は出雲出身の氏族および土着氏族の連合軍で、その総大将は長髓彦でした。卑弥呼無き後であったが、かれらは総力を結集して激しく抵抗しました。

#### ・長髓彦と饒速日命

「長髓彦」は生駒富雄地方の首長だけでなく、邪馬台国連合軍の総大将でもあり、饒速日命に仕えていました。彼は孔舎衛坂での防御に成功した後、桜井に布陣して神武軍を待ち受け激しく戦いましたが、好戦的すぎるとして、義弟、饒速日命に殺害されました。





## 遺跡と古墳

行程の順に、博物館や遺跡、古墳の紹介をします。

### ①島根県立古代出雲歴史博物館

1 F : 中央ロビー、常設展示 (テーマ別展示室、神話展示室、総合展示室)

2 F : カフェと空中回廊

3 F : 展望テラス

主に1階の展示室を見て下さい。

#### \*常設展示

##### 中央ロビー展示

この出雲大社境内から 2000 年に発見された、「宇豆柱 (うづばしら)」を展示します。



#### 1 テーマ別展示室

出雲大社、出雲風土記、青銅器の 3 テーマから、島根の古代文化を紹介します。

\*出雲大社の各時代の神殿の模型が展示されています。

(平安時代は 48 m の巨大神殿であったとされています)



平安時代の本殿 1/10 模型



出雲大社境内模型(慶長期)



出雲大社境内模型(寛文期)

#### \*青銅器と金色の大刀

2 日目に訪問する荒神谷遺跡から出土した「358 本の銅剣」「銅鐸 6 個、銅矛 16 本」(何れも国宝) の現物を展示しています。

また、今回は訪問出来ませんが、加茂岩倉遺跡の銅鐸 39 個 (国宝) も展示しています。

#### 2 神話展示室「出雲神話回廊 (神話シアター)」

「古事記」や「日本書紀」、「出雲国風土記」には、出雲を舞台とした地域色豊かな神話が伝えられています。この島根を舞台とした神話伝承を分かりやすく紹介します。

### 3 総合展示室

島根の歴史と文化を特徴づける2日目に訪問する西谷墳墓群の「四隅突出型墳丘墓」や「出雲の玉作」「石見銀山」「たたら製鉄」を重点展示として大きく扱います。

#### ②西谷墳墓群史跡公園

\*駐車場から丘に上がり、3号墓と2号墓内部展示室を見学する予定です。

「西谷墳墓群」では、弥生時代後期から古墳時代、そして奈良時代にかけてたくさんの墓が造られました（墳丘を持つ墓だけでも27基が密集）。特に弥生時代後期～終末期に造られた6基の四隅突出型墳丘墓は、出雲の権力者たちの墓として全国的に有名です。

西谷墳墓群の中で特に巨大な規模を持つ2号墓、3号墓、4号墓、9号墓は、弥生時代に出雲を支配した王たちの墓と考えられます。

墳丘はどれも斜面が貼石でおおわれ、裾まわりにも石敷きや石列がぐるりとめぐっていましたが、弥生時代としては、全国トップクラスの壮大な王墓です。

#### 3号墓

「西谷の丘」に造られた最初の王墓で、弥生時代後期後葉のもので、突出部を含めた規模は約55m×40m、高さ4.5mです。裾まわりの石列は2列です。



#### 2号墓内部展示室

3号墓の次の代の王墓です。大部分が破壊されていましたが、発掘調査で巨大な墳墓であったことが判明しました。突出部を含めた規模は約50m×35m、高さ3.5mです。史跡公園では当時の姿を復元し、また内部の展示室は、自由に見学できます。



#### ③荒神谷遺跡

荒神谷遺跡は昭和58年(1983年)遺跡分布調査で、発見されました。遺跡の南側に『三宝荒神』が祭られていることから荒神谷遺跡と命名され、翌昭和59年、谷あいの斜面を発掘調査したところ、358本の銅剣(どうけん)が出土しました。

(※) 実際に出土した青銅器：銅剣358本、銅鐸6個、銅矛16本(一括国宝指定)は、現在、文化庁が所蔵し、島根県立古代出雲歴史博物館で常設展示されています。

#### 常設展(荒神谷内展示室にて)

『荒神谷遺跡発掘ドキュメント』『出雲の原郷』

ここでは大画面のモニターを使い、『荒神谷遺跡発掘ドキュメント』と題し、荒神谷遺跡の発掘や展示の歴史を振り返ります

#### ④史跡加茂岩倉遺跡（国史跡）（今回は時間の都合で訪問できません）

弥生時代の青銅器埋納遺跡です。1996（平成8）年10月14日、農道の工事中に大量の銅鐸が出土したことにより発見されました。

その後の発掘調査によって、銅鐸の総数は39個となり、1カ所からの出土としては全国最多となりました。（銅鐸は、国宝に指定：島根県立古代出雲歴史博物館で常設展示）

.....

#### （解説） 四隅突出型墳丘墓

弥生時代中期以降、吉備・山陰・北陸の各地方で行われた墓制で、方形墳丘墓の四隅がヒトデのように飛び出した特異な形の大型墳丘墓で、その突出部に葺石や小石を施すという墳墓形態である。四隅突出型弥生墳丘墓とも呼称する。

弥生中期後半から広島県の三次盆地に発祥し、弥生後期後葉から美作・備後の北部地域や後期後半から出雲（島根県東部）・伯耆（鳥取県西部）を中心にした山陰地方に見られるようになった。北陸では少し遅れて造られている。源流は今のところ判明していないが、貼り石方形墓から発展したという可能性もある。

日本海側を中心に約90基が確認されている。北陸地方（福井県・石川県・富山県）では現在までに計8基が知られている。

#### 楯築遺跡（たてつきいせき）：「楯築墳丘墓」

岡山県倉敷市矢部の丘陵上にある弥生時代の墳丘墓。

弥生時代後期(2世紀後半～3世紀前半)に造営された首長の墳丘墓である。墳丘の各所から

出土した土器片の多くが壺形土器、**特殊器台・特殊壺**の破片である。

直径約43メートル、高さ4.5メートルの不整形の主丘に北東・南西側にそれぞれ方形の突出部を持ち、現在確認されている突出部両端の全長は72メートルで同時期の弥生墳丘墓としては日本最大級である。

#### 前方後円墳との関連について（坂東私見）

出雲を中心とした山陰～北陸にわたる日本海沿岸の文化交流圏は、吉備を中心とした文化圏とは互いに交流していたものと思われる。

吉備の双方中円墳は、出土した特殊器台・特殊壺等から、大和の纏向型前方後円墳や最初の大型前方後円墳「箸墓古墳」と大きく関連するものと思われる。

西山3号墳には、吉備の特殊器台、特殊壺が出土し、**因幡の新子谷1号墓（2世紀）**には丹波、但馬、越、吉備、大和の土器が供献されている。首長間の交流の証しである。

以上